

【体験版】近衛団長の魔石
に痴態を録られ、毎晩寸止
めで犯される王宮使用人の
隷属カルテ

[タブューへ](#)

体 験 版

1

第一話 屋上の取引

サインも契約もない。それでも俺の夜は、近衛騎士団長のものになった。

夜明け前の王宮は死んだように静かだった。回廊の灯りは半分落ちている。衛兵の足音も遠い。

俺の心臓だけが、うるさかった。

名前は焰。半月前に下働きとして入った、ただの新入り使用人。表向きは。

本当の狙いは別にある。兄をはめた男の証拠を、この王宮から盗み出す。それだけのために、俺はここにいた。

半月かけて、監視の目の死角も衛兵の交代も

頭に入れた。今夜が初めての勝負だ。

手にはろうそく立てが一本。見回りで拾った
とでも言い訳できる。

本来なら、こんな小細工はしない。見つかれ
ば殴り倒して逃げる。それが俺のやり方だった。

だが今夜は殴れない。逃げれば、兄の名前は
二度と戻らない。

あと10分で巡回が来る。それまでに執務区画
の記録板から証拠を抜く。

兄を潰したのは巖。王の名代として実務を握
り、邪魔者を事故で静かに消す男だ。兄はその
不正に気づいた。たったそれだけで、半年前、

無実の罪を着せられた。

ろうそく立てが冷たい。俺はその冷たさへ意識を逃がした。手は震えていない。兄のためだ。ここで折れるわけにはいかない。

執務区画の鍵を指先でなぞると、音もなく開いた。

目当ての記録板は机の上。あと数歩――。

背後で空気が動いた。

振り向く前に腕を取られ、壁へ叩きつけられる。ほほが冷たい石に押し付けられた。

「不法侵入。規律違反だ」

低い声だった。温度がない。

近衛騎士団長の冴。寡黙な男だ。王室警護の実務を統べる若き団長で、表向きは巖の指揮下で忠実に動く。半月のあいだ、俺はこの男を巖の番犬としか見てこなかった。最大の障害だ。

その番犬が今、俺の腕をねじり上げている。

「離せ」

にらみ返した。だが体が言うことを聞かない。恐怖と緊張で、腹の奥がなぜか熱かった。押し付けられたものの間で、布の下の俺のものが反応している。最悪だ。よりによって今。

冴の目が、そこへ落ちた。

冴の手の中で、小さな石が淡く光った。低い

反響が、一度、空気を震わせる。近衛が証拠保全に使う、記録石だ。目の前の場면을、そのまま幻影に写し取る魔道具。

「……何を、写した」

「侵入の証拠。それと、これを」

記録石の表面に、俺の姿が浮かんでいた。壁に押さえつけられ、布を押し上げた、無様な俺が。淡い幻影が、ゆらりと揺れている。

「規定では、即刻、上へ報告する」

冴はそう言った。だが報告しなかった。記録石を下ろし、俺を見据えたまま続ける。

「黙っていてほしいなら、毎晩、屋上へ来い」

毎晩、屋上へ来い。意味が分からなかった。

普通なら侵入者はその場で巖へ突き出す。手柄になるからだ。なのにこの男はそれをしない。幻影を写し取って、自分の手元に俺を縛ろうとしている。

頭の隅で警鐘が鳴った。この取引には裏がある。

だが見抜く前に、俺は答えを出さなきゃならない。今、この場で。

殴って逃げる。一瞬そう考えた。気絶させて消えるのは簡単だ。だができない。俺が消えれば潜入は終わり、兄の証拠は永遠に手に入らな

い。

俺は握った拳を、ほどいた。

「……わかった」

奥歯をかんで、そう言った。

屋上へ続く階段は塔の奥にある。狭くて暗い。

俺は冴の後ろを一段ずつ上った。逃げ場が足元から消えていく。

屋上に出ると、夜明け前の風が顔を打った。
手すり。給水塔。隅で篝火がひとつ消えかけている。月明かりも雲に隠れていた。

ここは死角だ。冴が選んだのは、誰の目も届かない場所だった。

「脱げ」

冴が短く言った。命令だ。

俺は動かず、にらみ返した。

「規定だ。検分する」

「……検分？ 笑わせんな。騎士団長サマが、
こんな夜中に使用人の体をいじくり回すのが、
ご立派なお勤めか」

吐き捨てた。だがここで逆らえば、あの幻影
が上へ回る。兄の証拠が遠のく。俺は上着に手
をかけ、一枚ずつ脱いでいった。シャツのボタ
ンを外す指が、屈辱で冷たい。

さらした肌を、夜風が伝う。鳥肌が立った。

冴の視線が、俺の体をなぞる。値踏みする目だ。脅威の度合いを測る、警備の男の目。情も欲も、表に出さない。肩、胸、腹、脚。持ち物を点検するように、上から下まで検める。

「肩に古い傷。利き腕は右。脚の鍛え方は、ただの下働きじゃない」

冴は読み上げた。俺の体を、数えるみたいに。

「使用人にも腕っぷしは要る」

「そういうことにしておく」

冴は表情を変えない。俺の素性を半分は見抜いている。そう感じた。なのに、上へ突き出す素振りにはなかった。今はそれどころじゃない。

「両手を手すりに」

冷たい鉄をつかんだ。夜露で湿っている。背後に牙が立ち、布越しに体温が伝わってきた。

大きな手が、胸へ回る。

指先が胸の先をかすめただけで、体が勝手に跳ねた。

「……ここか」

弱点を、たった今見つけた声だ。

指がそこをつまんで転がし、押し潰し、爪の先で弾く。腹の奥に熱が走って、下半身が勝手に張り詰めていく。やめろ。なんで反応してる。胸なんかで。

「触んな」

かみついた。だが声がかすれていた。

冴の指は急がなかった。焦らすように、同じ場所を責める。つまんでは離し、転がしては押し潰す。そのたびに腰が勝手に揺れて、胸の先が固くとがっていくのが、自分でも分かった。こんな場所が弱いなんて、今夜まで知らなかった。知りたくもなかった。

俺のものは、もう完全に頭をもたげていた。布の下で痛いほど張り詰めて、先からぬれている。

背後で冴の腰が触れた。布越しに、硬いもの

が当たる。雄の熱と、質量。鋼みたいに張り詰めたそれが、俺の尻へ押し付けられた。この男も兆していた。

俺は肩越しに振り返り、せせら笑ってやった。

「へえ。騎士団長サマのおちんちんも、ちゃんと反応してんじゃねえか」

わざと、子供の呼び方を選んだ。この男のプライドを、小さく削るために。

「検分の役得か？　しょぼいもんだな。思ったより、可愛い」

強がりだった。口で矮小化して、冷たい顔の奥をえぐってやりたかった。だが俺の声は震え

ている。尻に当たる雄は、台詞とは裏腹に、確かに俺をのみ込もうとしていた。その差を、俺自身がいちばん知っている。

冴は答えなかった。表情も変えない。

代わりに俺のズボンへ手をかけ、下着ごと引き下ろした。

俺のものが、夜明け前の外気にさらされる。先から透明な糸が、つうと垂れた。

冴の手が、それを握る。

熱くて、大きい手だ。剣を握る、硬い手のひら。根元から先まで一度ゆっくり扱かれて、腰が跳ねた。

「先走りが出てる」

冴は事実だけを口にする。

「侵入のときから、ずっとこうだった。記録に残っている」

「黙れ……っ。いちいち言うな」

手の動きが速くなる。ぬれた音が立った。

くちゅ、くちゅ、と。自分のこぼした先走りが、冴の手と俺のものの中で音を立てる。その音が、屋上の静けさにやけに大きく響いた。

冴の親指が、先のくぼみをぐりっとなぞる。

「っ、あ……っ」

声が漏れた。みっともない。くちびるをかん

でこらえる。

冴は俺の反応をすべて見ていた。どこを触れば俺がどう跳ねるか、一晩で読み取っていく。胸の先をもう片方の手でつまみながら、前を扱く。二か所を同時に責められて、腰の動きが止まらなくなった。

「あ、あ……っ、く、そっ」

限界がすぐに来た。腰の奥がせり上がる。出る。

だがそのとき、冴の指が根元をきつく締めた。

出口を、塞がれる。

「あ……っ、なんで」

「まだ早い。もう少し見ておく」

「ふざ、けんな……っ。中途半端は、きつい
んだよ……っ」

寸止めだ。行き場をなくした熱が、体の中で
渦を巻く。締め付けられたものが、痛いほど脈
打った。先走りが止まらず、根元を握る冴の指
を伝って垂れる。

屈辱だった。だがその屈辱の真ん中で、俺の
体は、もっと、と叫んでいた。信じられなかつ
た。

俺は震える声で、それでも笑ってやった。

「お前さ……っ、これが、騎士の、すること

かよ。番犬が、芸でも、仕込むみたいに……っ」

「黙れ。集中が乱れる」

冴の声が、一段、低くなった。気のせいかもしれない。

冴は俺を焦らし続けた。達しそうになるたびに根元を締めて、出させない。出口の手前で何度もせき止められて、俺の体は熱だけを抱え込んでいった。涙がにじむ。出したいのに出せない。腰が、自分の意志を離れて、冴の手へこすりつけようと前後に揺れる。情けない。だが止まらない。

「……たのむ、なんて、言わねえからな」

俺は意地を張った。屈服はしない。体がどれだけのまれても、口だけは折らない。それが俺の、最後の一線だった。折れたら、兄のところまで届かない。

冴はしばらく俺を見ていた。その視線が、いつもより少し長かった。

やがて冴の手が、根元から緩んだ。

「いい。出せ」

許しが下りた瞬間、俺は弾けた。

白濁が、屋上の床へ飛ぶ。一度、二度、三度。果てるたびに俺のものがびくびくと脈打つ。腰から力が抜けた。

冴が記録石をかざす。

石が淡く光り、低く震えた。

「――記録した」

俺の果てたばかりの体も、床を汚した証拠も、全部、石の中の幻影に収められた。

屈辱で頭が熱くなる。だがその熱の底で、俺の体はまだじんとしびれていた。写し取られた。それだけで、腹の奥がまた熱を持つ。

なんで俺は、これで満たされてる。

冴は背を向けて、屋上の出口へ歩き出した。

今夜、この男は俺を屈辱の底まで突き落とした。だが一度も、本気で壊そうとはしなかった。

寸止めを繰り返したのも、最後はちゃんと出させたのも、加減を知っているみたいだった。ただ痛めつけたいだけなら、こんな丁寧さは要らないはずだ。

報告しない。証拠を捨てない。誰の目も届かない場所を選ぶ。

点と点が、まだ線にならない。だが確かに、何かがある。

兄の顔が浮かんた。最後の面会で、もう何も期待していない目をしていた、あの顔が。だから俺が動く。こんな屈辱の中でも、目だけは閉じない。この男の正体も巖の不正も、俺が全部、

見届けてやる。

「明日も来い」

扉の向こうへ、冴の声が消えた。

俺は一人、屋上に残された。

手の中にはもう何もない。さっきまでの締め付けの感触だけが、まだ残っている。

報告しない男。筋の通らないことばかりする、この男の。その筋の通らなさの正体を、俺は必ず暴いてやる。

2

第二話

検分という名の躰

翌朝、俺はいつも通り使用人として働いた。

廊下を磨き、ろうそく立てを並べ直し、洗い物を運ぶ。何食わぬ顔で。だが頭の中では、ずっと昨夜のことを考えていた。

俺は執務区画へ侵入して、現場を冴に押さえられた。普通なら今ごろ、俺は捕らえられて王宮を追い出されている。

なのに、何も起きていない。

朝の点呼でも、俺の名は普通に呼ばれた。上役からの呼び出しもない。誰も俺を疑っていない。昨夜の侵入など、なかったみたいに。

つまり冴は、報告していない。

俺を脅して屋上へ呼んだくせに、上へは何も上げていない。決定的な証拠を握りながら、それを使っていない。

なぜだ。

番犬なら、侵入者を主人へ突き出すのが筋だ。手柄にもなる。なのにこの男は、その手柄を捨ててまで、俺を自分の手元に置いている。

裏がある。直感がそう告げていた。だがその裏が何なのかは、まだ見えない。

俺は雑巾を絞りながら、頭の隅で計算を続けた。冴の狙いを読めれば、それが俺の武器になる。脅されているのは俺だ。だが相手の狙いさ

えつかめば、立場は変えられる。

午後、妙なことがあった。

別の騎士が、新入りの使用人の身元を確かめたいと言い出したらしい。俺のことだ。だがその話は、いつのまにか立ち消えになった。聞けば、冴団長が「この区画は自分が見る」と引き取ったという。

偶然か。それとも、何かの意図か。

俺の身边に誰かが近づくたび、冴がそれを遮っている気がした。守られている――わけじゃない。監視のために、他人を寄せつけないだけだ。そう思おうとした。だが、その理屈にも無理が

あった。

回廊の先に、冴がいた。近衛騎士団長が、下働きの区画に用などないはずだ。なのにいる。俺を見ている。

目が合った。冴は何も言わず、立ち去った。

監視されていると、はっきり分かった。報告はしない。だが放しもしない。この男のやることは、何ひとつ筋が通らなかった。

その夜も、俺は屋上へ向かった。

行かなければ、あの幻影が表に出る。選択肢はない。狭い階段を上るたび、屈辱が足元から積み上がっていく。

屋上に出ると、冴はもう待っていた。手すりにもたれ、夜の街を見下ろしている。俺が来ると、ゆっくり振り返った。

「来たな」

「来なきゃ、お前があれをばらまくんだろ。
来るしかねえだろうが」

俺は吐き捨てた。

「で、今夜は何だ。また検分とかいう、ご立派なお勤めか」

冴は答えず、懷から何かを取り出した。

細口の、ガラス瓶だった。

月明かりに、透き通って光る。

「……ガラス瓶？」

意味が分からず、俺は眉をひそめた。

「何のつもりだ」

「規律違反者の矯正だ」

冴は瓶を手の中で軽く回した。透明な、ただの小瓶。だが飲み口がやけに、小さく見えた。

「だがその前に、検分だ。両手を手すりに」

また検分か。俺は奥歯をかんだ。だが逆らえば、あれが出る。冷たい鉄をつかんだ。背後に冴が立つ。

大きな手が、上着の中へ滑り込んできた。

「っ……」

冷たい指が、いきなり胸の先に触れる。昨夜の弱点を、この男は正確に覚えていた。

「昨夜より、立ち上がりが早いな」

冴は事実を読み上げる。指で胸の先をつまみ、転がし、押し潰す。そのたびに俺の腰が跳ねた。

数回いじられただけで、布の下の俺のものが、もう兆していた。情けないほど早い。昨夜、この体は弱点を覚え込まされたのだ。一晩で。

「触んな……っ。検分なら、もう済んだだろ」

「経過観察も検分のうちだ」

冴の手がズボンと下着を下ろした。夜風が下半身をなでる。さらされた俺のものは、もう半

分以上、頭をもたげていた。先がてらりと光っている。

冴はそれには触れず、代わりに、さっきのガラス瓶を俺に握らせた。

「自分で立たせて、この口へ入れろ」

正気か。俺は瓶の細い飲み口を見た。こんな小さな穴に、入れろというのか。

「ふざけんな。誰がそんな――」

「やらないなら、これを上へ回す。今すぐ」

冴はもう片方の手に、記録石を握っていた。淡い光が、その手の中でくすぶっている。脅迫だ。いつもの手だ。

俺はくちびるをかんだ。屈辱で頭が熱くなる。
だが、やるしかなかった。ここで折れれば、潜
入も兄の証拠も、全部終わる。

俺は自分のものへ手を伸ばした。敵の目の前
で。見られながら自分で扱う。最悪の状況だ。
なのに。

手を動かすうちに、俺のものはすぐに完全に
張り詰めた。さっき胸を責められた熱が、まだ
残っている。見られているという感覚が、また
腹の奥に火を点けた。

くそ。なんでだ。なんでこんな状況で、こん
なに固くなる。

先が、もうぬれている。

「入れろ」

冴が促す。

俺は瓶の飲み口を、自分の先へあてがった。

冷たいガラスの縁が、いちばん敏感な部分に触れて、背筋がぞくりとした。

ゆっくり、押し込む。

飲み口は狭かった。張り詰めた先が、無理やりガラスの口を押し広げて、中へ入っていく。
きつい。ぎちぎちと、ガラスの縁が締めつける。
だがその圧迫感が、なぜか、たまらなかった。

「あ……っ」

声が漏れた。半分ほど入れたところで、瓶が俺のものを締めつけ、固定する。引いても、簡単には抜けない。

「抜けないだろう」

冴は事実を読み上げる。

「形が合っている。出してなえさせろ。それしか、抜く方法はない」

「……っ、これがお前の騾か。趣味、悪いな、騎士団長サマ」

俺は笑ってやろうとした。だがガラスに締めつけられたものは、痛いほど張り詰めて、先走りをこぼし続けている。透明な瓶の内側を、俺

のこぼしたものが、つうと伝い落ちた。台詞だけが、虚しく宙に浮く。

俺は腰を動かした。ガラス瓶の中で、自分のものをこする。なめらかな内側が、先をぬるぬると刺激する。妙な感触だ。だが、効いた。腰の奥が、じんとしびれてくる。

透明なガラス越しに、俺のものが見えていた。締めつけられて張り詰めた雄が、瓶の中で脈打っている。こぼした先走りが、ガラスの内側を白く曇らせていく。逃げ場がない。自分の高ぶりが、透けて、全部見えている。

「いい眺めだ」

冴が言った。温度のない声で、俺のいちばん見られたくない姿を眺めている。

「ガラス瓶で腰を振る使用人か。検分のしがいがある」

「黙れ……っ。見てんじゃ、ねえ」

だが、見られていると思うほど、俺のものはガラスの中で固くなった。最悪の体質だ。昨夜気づきたくなかった事実が、また突きつけられる。俺は、見られると、高ぶる。

冴の手が、また胸の先をつまんだ。

「っ、また、そこ……っ」

胸と、ガラスの締めつけと。前と後ろから攻

められて、腰の動きが止まらなくなる。

「お前は今、何をしている」

冴が、不意に問うた。

「……は？」

「自分が何をしているか、口で言え。言わないなら、ここで止める。中途半端のまま、朝までな」

冴の手が、瓶の底に添えられた。出口を、塞ぐように。

屈辱だった。言わせる気か。自分の口で。だが、ここで止められたら、この生殺しが続く。

「……っ、瓶に、入れて、こすってる」

俺は奥歯をかんで、絞り出した。

「何を、だ」

「……っ、俺の、を」

「名前を、言え」

冴の声は、温度がないままだった。それが、
よけいに俺を追い詰める。

ちくしょう。こいつ。

「……俺の、おちんちんを、瓶に、突っ込ん
で、振ってる……っ。これでいいか、クソ団長」

言い終えて、屈辱で目の奥が熱くなった。だ
が、言わされた羞恥が、なぜか、腹の奥の熱を
さらに煽った。自分の口にした途端、俺のもの

がガラスの中でびくんと跳ねる。

最悪だ。言わされて、興奮してる。

限界が、すぐに来た。腰の奥がせり上がる。

出る。

だがそのとき、冴の手が瓶の底を押さえた。

俺の動きが、封じられる。

「あ……っ、なんで」

「まだだ。もう少し、見ておく」

「ふざ、けんな……っ。出させろ……っ」

寸止めだ。出口まで来た熱が、行き場をなくして、体の中で渦を巻く。ガラスに締めつけられたものが、痛いほど脈打った。こぼれ続けた

先走りが、透明な瓶の底に、たまっていく。

冴は俺を焦らし続けた。瓶の底に手をあてたまま、俺が達しそうになるたびに、動きを封じる。出口の手前で何度もせき止められて、俺の体は、熱だけを抱え込んでいった。

涙がにじむ。出したいのに出せない。腰が、自分の意志を離れて、押さえられた瓶へ、自分からこすりつけようとしている。意地と体が、完全に裂けていた。

瓶の底には、こぼれた先走りが、うっすらとたまり始めていた。透明なガラスの底に、俺の高ぶりの証拠が、見えている。その光景が、よ

けいに俺を追い詰めた。

「……たのむ、なんて、言わねえからな」

俺は震える声で、意地を張った。屈服はしない。体がどれだけのまれても、口だけは折らない。行為は言わされた。だが、命乞いは、しない。それが俺の、最後の一線だった。

冴はしばらく、俺を見ていた。何か言いたげに。いや、何も言わずに。その視線が、いつもより少しだけ、長かった。

やがて、冴の手が、瓶の底から離れた。

「いい。出せ」

許しが下りた瞬間、俺は弾けた。

ガラス瓶の中へ、思いきり放つ。白濁が、透明なガラスの内側を汚していく。一度、二度、三度。自分の出したもので、瓶が濁った。果てるたびに、俺のものが瓶の中でびくびくと脈打つ。腰から、力が抜けた。

最悪に、みじめな射精だった。敵の目の前で、ガラス瓶の中へ、自分の手で。

張り詰めが収まると、瓶はようやく緩んだ。俺はそれを引き抜いた。先がぬるりと抜ける感覚に、また腰が震える。

冴が記録石をかざす。

石が淡く光り、低く震えた。

「――記録した」

俺の精で濁った瓶も、それを握る俺の手も、
果てたばかりの体も、全部、石の中の幻影に収
められた。

屈辱で頭が真っ白になる。だがその白さの底
で、俺の体は、まだじんと熱を残していた。写
し取られた。また、記録された。それだけで、
腹の奥が熱を持つ。

なんで俺は、これで満たされてる。

冴は、濁った瓶を俺の手から取り上げた。そ
して、無造作に懐へしまった。

「……おい。それ、どうする気だ」

「証拠の保管も、職務のうちだ」

冴はそれだけ言った。

俺の出したもので濁ったガラス瓶が、この男の懐の中にある。その事実が、妙に生々しかった。

今夜もこの男は、俺を屈辱の底まで突き落とした。だが一度も、本気で壊そうとはしなかった。寸止めを繰り返したのも、最後はちゃんと出させたのも、加減を知っているみたいだった。

報告しない。証拠を捨てない。他人を俺に近づけない。そして、決して度を越さない。

点と点が、まだ線にならない。だが確かに、

何かがある。この冷たい男の奥に、俺の知らない事情が、隠れている気がした。

兄の顔がよぎった。あの人は最後まで、誰も責めなかった。無実の罪を着せられても、ただ静かに、お前は巻き込まれるな、と言っただけだ。あの諦めた目を、俺は忘れられない。

だから、俺が代わりに動く。たとえこんな屈辱の中でも、目だけは閉じない。

冴は背を向け、屋上の出口へ歩き出した。

「明日も来い」

それだけ言って、扉の向こうへ消えた。

俺は一人、屋上に残された。手の中には、も

う何もない。さっきまでの締めつけの感触だけが、まだ残っている。

懐の中の瓶。あの男は、それをどうするつもりなのか。

筋の通らないことばかりする、この男の。その筋の通らなさの正体を、俺は必ず暴いてやる。その糸口はきっと、あの懐の中の瓶にも、隠れている。

体験版はここまで

これは、まだ入口です。

この先で、すべてが変わります。
選択も、関係も、そして――結果も。

知らないままで終わるか、
それとも、最後まで見届けるか。

答えは、本編にあります。

【体験版】近衛団長の魔石に痴態を録られ、毎晩寸止めで犯
される王宮使用人の隷属カルテ